



TITLE:

アブドゥッラー・バスメーの経歴

AUTHOR(S):

山本, 博之

CITATION:

山本, 博之. アブドゥッラー・バスメーの経歴. CIRAS discussion paper No.78: 『カラム』の時代 IX –マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2 2018, 78: 37-40

ISSUE DATE:

2018-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_78_37

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

アブドゥッラー・バスメーの経歴

山本 博之

アブドゥッラー・バスメー (Abdullah Basmeh)¹⁾は、シンガポールで1950年代および60年代に刊行されていたマレー語月刊誌『カラム』(Qalam)の編集に携わり、シンガポールのムスリム同胞団(Ikhwan al-Muslimin)²⁾の結成と活動においても重要な役割を担ったと考えられている。

1950年代半ばにシンガポールで活動したムスリム同胞団は『カラム』と密接な関わりを持っていた。ムスリム同胞団の本部事務所はカラム出版社に置かれ、『カラム』誌上で設立と団員募集が発表され、『カラム』の発行者・編集社であるサイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル＝エドルス (Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)³⁾が誌面を通じてムスリム同胞団の団員にむけた論文を連載した。『カラム』の毎月の誌面にはシンガポール内外の各地から寄せられた入団希望者の名前と住所の一覧および団員たちが投稿する各地の活動紹介が写真入りで掲載され、『カラム』はムスリム同胞団の事実上の機関誌となっていた[山本 2003]。

『カラム』の刊行は1969年まで続いたが、ムスリム同胞団についての記事は1962年末を境にしてほとんど見られなくなる。これは『カラム』の編集者の1人だったバスメーが『カラム』社を辞職した時期と重なっている。ムスリム同胞団の設立においてエドルスとバスメーがそれぞれどのような役割を果たしたのかはまだ明らかでない部分が多いが、活動の過程でバスメーが重要な役割を果たすようになり、バスメーが『カラム』社を辞めたことでムスリム同胞団の活動が『カラ

ム』に掲載されなくなったものと考えられる。

バスメーはカラム社を辞めた後にシンガポールからマレーシアに移って多くの宗教書の翻訳や執筆を行い、マレーシアでは今日でも高い評価を受けているウラマー (イスラム法学者) として知られている。他方でシンガポール時代のバスメーについては研究が少なく、アラブ出身のウラマーであるとされている程度である。ただし、バスメーや関係者が語ったことを総合すると、バスメーは正規の宗教教育を十分に受ける機会がなく、自分でアラビア語やマレー語の本を読み、後にはアラビア語の記事をマレー語に翻訳することを通じてイスラム教についての理解を深めていったことがうかがえる。

本稿では、ムスリム同胞団と『カラム』の関係を簡単にまとめた上で、それらに密接に関わっていたバスメーの経歴を紹介する。バスメーの経歴は、マレーシア・イスラム開発局 (JAKIM) がまとめているバスメーの個人情報ファイル⁴⁾、シンガポール・マレーシアで発行された雑誌記事⁵⁾、関係者へのインタビューに基づく研究[Wan Ramizah 2000]がある⁶⁾。いずれも当事者による説明であり、別の情報に照らした検証が十分になされていない部分もあるが、本稿では特に示さない限りこれらの資料をもとにバスメーの経歴を記述している。

なお、バスメーは『カラム』誌上でもいくつかの連載および翻訳コラムを執筆しており、それらを通じてバスメーの思想を探ることも可能だが、本稿ではバスメーの思想は検討しない⁷⁾。また、バスメーがマレーシアに移った後の詳細な経歴についても本稿では扱わない。

1) フルネームはシェイク・アブドゥッラー・バスメー・シェイク・ムハンマド・バスメー (Sheikh Abdullah Basmeh bin Sheikh Muhammad Basmeh)。本稿で紹介するように、名前の綴りはシンガポール時代にはAbdullah Basmeh、マレーシア時代にはAbdullah Basmehだった。本稿ではアブドゥッラー・バスメー (または略してバスメー) と呼ぶ。

2) シンガポールのムスリム同胞団はエジプトのムスリム同胞団と組織的な関係はなかった。本稿では特に断らない限り「ムスリム同胞団」とはシンガポールのムスリム同胞団を指す。

3) アフマド・ルトフィ (Ahmad Lutfi) をはじめ、さまざまなペンネームを用いていた。

4) JAKIM. “Kertas Kerja Biodata Sheikh Abdullah Basmeh”. Jabatan Kemajuan Islam Malaysia (JAKIM).

5) 主なものに『Qiblat』(1975年10月号)、『Menara』(1978年8月号)、『Dewan Siswa』(1979年7月号)、『Dakwah』(1989年3月号) などがある。

6) バスメーの思想に関する研究は多いが、バスメーの経歴については[Wan Ramizah 2000]が最も信頼できる。

7) エジプトのムスリム同胞団の思想とも関係する連載「クルアーンの秘密」について[國谷2010; 2011]が分析している

1. ムスリム同胞団と『カラム』

ムスリム同胞団は、第二次世界大戦中の日本軍政から解放されてイギリスの統治下で戦後復興が進められていたシンガポールで、脱植民地化が具体的に検討され始めていた1956年に結成された。この背景には、選挙の導入により議会でイスラム主義政党が多数派を占めることでイスラム国が実現するという期待に対し、1955年にインドネシア、シンガポール、マラヤでそれぞれ行われた総選挙でいずれの国においても国民主義政党が与党になってイスラム系政党が野党になり、イスラム国の樹立も東南アジアのマレー・イスラム国家の統合も実現しなかったことがある。また、東西対立が進む中で米ソが科学技術の開発競争を進めており、開発競争に残されればムスリムは米ソによって東西陣営に分断されてしまうとの恐れがあった。共産主義と無神論の浸透を受けて神を畏れず両親や教師を重んじない若者世代が登場したことは、この恐れを現実のものと思わせた。

『カラム』誌上でムスリム同胞団の結成が呼びかけられると、カラム社に置かれたムスリム同胞団の本部事務所に入団申し込みが寄せられた。『カラム』誌上に毎号掲載された団員名簿では、団員番号は1番から4,744番まで与えられており、重複登録者を除くと同胞団員は3,543人になる。その地理的広がりには、シンガポール(566人)、マラヤ各州(計2,475人)⁸⁾、ボルネオ島(計481人)⁹⁾を中心に東南アジア各地に及び¹⁰⁾、1956年6月から1962年11月まで途切れずに入団者が続いていた¹¹⁾。

『カラム』誌上で同胞団員に向けた論文が連載されたことに加え、各地の同胞団員が写真を添えて活動内容を紹介する記事を投稿し、それらの記事が掲載されることで、各地の同胞団員が相互に連絡を取り合うようになっていった。ボルネオ島北部の北ボルネオ(サバ)ではムスリム同胞団の活動を契機としてサバ同胞団が結成された¹²⁾。

8) ペラ620人、スランゴール368人、ジョホール361人、クダ265人、パハン228人、クランタン186人、ベナン144人、ヌグリスンビラン126人、トレンガヌ92人、マラッカ68人、ブルリス17人。

9) サラワク195人、北ボルネオ(サバ)179人、ブルネイ107人。

10) このほかタイ2人、インドネシア(スマトラ)2人、香港1人、メッカ1人、クリスマス諸島1人、不明4人。

11) 1956年6月からの6か月ごとの新規入団者数は、順に743人、970人、416人、131人、202人、170人、238人、165人、98人、103人、120人、106人、83人だった。

12) サバ同胞団については[山本2006]を参照。

しかし、団員名簿は1962年11月号を最後に突然掲載されなくなった。これ以降は、1963年2月のクダおよび1963年4月のブルネイでの同胞団員の活動報告を除いて、『カラム』誌上で「ムスリム同胞団」と言えばエジプトのムスリム同胞団に関する記事だけになった。ムスリム同胞団の活動を終えることについて言及した記事は見当たらないが、1962年12月頃に事実上の活動停止状態になったものと考えられる。

この詳細な背景はわからないが、1962年12月にバスメーがカラム社を解雇されたことと密接に関係していたものと推測される¹³⁾。『カラム』ではバスメーによるアラビア語雑誌からの翻訳記事が掲載されていたが、1963年1月号を最後に掲載されなくなった。また、バスメーは1962年2月に自らが行ったメッカ巡礼の様子を『カラム』の1962年8月号からメッカ滞在記として連載していたが、1962年11月号に「次号に続く」と書かれたまま、翌月号以降に続きが掲載されることはなかった。バスメーがカラム社を去ったのと同じタイミングでムスリム同胞団の記事が『カラム』誌上から消え去ったのである。

2. バスメーの経歴

バスメーは1913年12月29日にメッカのアル＝ハラム・モスク付近のMa'abdah地区で生まれた¹⁴⁾。父シェイク・ムハンマド・バスメー・サレー・バスメー(Sheikh Muhammad Basmeih bin Salleh Basmeih)はハド라마ウト地方出身のアラブ人、母アイシャ¹⁵⁾はサウジアラビアのビーシャ(Bishah)出身のアラブ人である。父はアイシャと結婚する前にマラッカで暮らしており、マラッカで父親代わりだったアブドゥル・ジャリル(Haji Abdul Jalil bin Abdullah)の勧めでマレー人女性と結婚していた¹⁶⁾。母アイシャはバスメーが2歳のときに亡くなり、バスメーはおばのハディジャ(Khadijah Hammad)に育てられた。ハディジャは独身でバス

13) シンガポールの植民地当局はムスリム同胞団の設立時から警戒しており、東南アジア各地の植民地政府に情報を提供していた[山本 2006]。活動停止の背景には植民地当局による干渉という要因もあったと想像されるが、これに関する情報は得られていない。

14) 1913年生まれは父親の説明による。バスメーは1927年にマラヤに渡ったときに12歳だったので逆算して1915年生まれであるとした。

15) アイシャ・アブドゥッラー・ハマド(A'isyat binti Abdullah bin Hammad)。

16) この結婚では娘が生まれていたが、家族でメッカに渡って数か月後に妻と娘が亡くなり、その後で父はアイシャと結婚した。

メーのほかにも子どもを引き取って育てており、結婚式などに招かれて詩の朗読を行っていた。

メッカ巡礼者の案内役だった父はメッカとマラッカを頻繁に行き来しており、やがてマラッカのマレー人女性ヤンチック (Yang Chik binti Hj. Kesash) と結婚し、シェイク・サイド (Sheikh Said) とシェイク・サリム (Sheikh Salim) の2人の息子が生まれた。このときバスメーはまだメッカでハディジャに育てられており、バスメーと弟たちの歳は3、4歳しか離れていなかった。

バスメーは7歳のときに近所の学校に通った後、1927年に父に連れられてマラヤに移り、マラッカで両親や弟たちと暮らした。父は市場で食堂を開き、バスメーは父の仕事を手伝った。2年後、バスメーはすでに14歳になっていたが、校長の計らいで地元のマレー語中学校の1年生に入学が認められた¹⁷⁾。父が亡くなり、残されたわずかのゴム林では家族が暮らしていくのに不十分だったため、バスメーは果物や魚を売ったりして生計を支えた。1931年に中学校を卒業したバスメーは英語の学校に進みたかったが、金銭的な事情で進学を断念した。バスメーの父がマラッカ滞在中に世話になっていたアブドゥル・ジャリルはマラッカ・マレーカレッジ (Maktab Melayu Melaka) の元校長で、バスメーはアブドゥル・ジャリルの家で本や雑誌を読んで独学した。

バスメーはさまざまな仕事に就き、1936年にはバンダルヒル英語学校 (Sekolah Inggeris Bandar Hilir, 現Sekolah Tinggi Melaka) の学生寮で料理手伝いになった。マレー人学生がまじめに勉強しないために試験に受からないことを目の当たりにしたバスメーは1937年に「Penulis Melaka」のペンネームでマレー人学生を批判する記事を投稿し、『ワルタ・マラヤ』 (Warta Malaya) 紙に掲載された。

バスメーは1937年にシンガポールに移り、オランダ人が経営するゴム工場で働いた後、義母ヤンチックからもらった40ドルを元手にして生地を売り歩く仕事を始めた。この仕事を通じてゲイラン地区で商売を営むハジ・アリ (Haji Ali bin Mohd Tahir) と知り合い、ハジ・アリはバスメーを自分の家に寝泊まりさせて家族同然に扱った。1939年、バスメーはハジ・アリの勧めでハジ・アリの娘のハワ・プテ (Hajjah Hawa Puteh)¹⁸⁾

17) このとき弟のシェイク・サイドは同じ中学校の3年生だった。バスメーは1か月後に2年生に編入された。

18) プテは愛称。マラッカ出身でシンガポールに移った。祖父母はインド出身。

と結婚した。バスメーは26歳、ハワ・プテは16歳だった。この結婚によってバスメーとハワ・プテは8人の娘と6人の息子を得た。

バスメーとハワ・プテはゲイラン地区のクイーン劇場 (Queen Theatre) の裏手に食堂を開き、名物のバグダッド風ロジャック¹⁹⁾ で知られるようになった。この店をよく利用したジャーナリストたちと親しくなり、アブドゥル・ラヒム・カジャイ (Abdul Rahim Kajai)²⁰⁾、イスハク・モハマド (Ishak Haji Muhammad)²¹⁾、サイド・フセイン・アリ・アル＝サゴフ (Syed Hussein Ali Al-Sagoff)²²⁾ らと知り合った。これによりバスメーの執筆への関心が復活し、マレー人の礼拝前の淨め (ウドゥ) のやり方への批判などの記事を投稿し、『ワルタ・マラヤ』に掲載された。それ以来、「Ibn Mohamad Azzhari」のペンネームで、自分が書いた記事やカイロ発行のアラビア語週刊誌『al-Musawwar』の記事の翻訳記事を執筆・投稿した。

バスメーの記事は『ウトゥサン・ムラユ』のモハマド・ダフラン・マスド (Haji Mohammad Dahlan Masood) の目に留まり、『al-Musawwar』の記事をマレー語に翻訳する仕事を任された。月給は15ドルだった。これによってバスメーはジャーナリズムの道に進むことになった。

1950年に『カラム』が創刊され、バスメーはアラビア語からマレー語への翻訳のためにカラム社に雇用された。月給は90ドルだった。1953年にカラム社が児童向け雑誌の『Kanak-Kanak』²³⁾ および日曜版の『Warta Mingguan』を刊行すると仕事量が増え、給料は月給300ドルに上がった。この2つの雑誌は3年間続いた。

3. バスメーの解雇

冒頭で触れたように、バスメーは1962年末にカラム社を辞めている。バスメーとエドルスの間で1966年から67年にかけてシンガポール高裁で行われた裁

19) ロジャックは野菜や果物を混ぜた軽食でシンガポールの名物料理の1つ。

20) 1894～1943年。『ワルタ・マラヤ』や『ウトゥサン・ムラユ』 (Utusan Melayu) などのマレー語新聞の編集者をつとめ、「マレー語ジャーナリズムの父」と称される。

21) 1909～1991年。ジャーナリスト・著作家。カジャイのもとで『ウトゥサン・ムラユ』の編集に携わる。

22) 『ワルタ・マラヤ』の出版者。

23) YAMAMOTO Hirokyu (comp.). 2017. *Jawi Magazine Reprint Series 2: Kanak-Kanak. (CIRAS Discussion Paper No. 74)*. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

判²⁴⁾によれば、バスメー解雇の様子は以下のものであった。

1962年12月1日にバスメーがエドルスを訪ね、バスメーの翻訳で出版された本による収入の一部を支払ってほしいと求めた。売り上げ収入があったら支払うとエドルスが答えるとバスメーはいったん帰ったが、12月17日に再びエドルスを訪ねて支払いを求めた。エドルスがまだ売り上げ収入が入ってこないと答えると怒ったバスメーはエドルスに殴りかかり、エドルスはバスメーを解雇して、傷害事件として警察に届けた。

その後、バスメーは、1951年から20年間にわたって自身がアラビア語からマレー語に翻訳した20冊の本の出版による利益の1割に相当する1万8,000ドルを翻訳料として支払うことを求めてカラム社に対して裁判を起こした。バスメーはカラム社に勤務した1950年から1962年の間に翻訳に関わって1,650ドルしか受け取っていないと主張した。これに対してエドルスは、月給90ドルには翻訳料が含まれているために改めて翻訳料を支払う必要はないと主張し、バスメーが1959年から1962年の間にカラム社から借用して未返済になっている771ドルを支払うよう求めた。1967年3月17日、シンガポール高裁はカラム社がバスメーに翻訳料を支払うべきとするバスメーの訴えを退け、バスメーに対して借金の未返済分771ドルをカラム社に支払うよう命じた。

4. おわりに

カラム社を辞めたバスメーはフリーの立場で執筆などの活動を行うようになった。バスメーは1963年から2年間、毎週金曜日に15分間のラジオ番組「五行」(Rukun2 Islam)を担当した²⁵⁾。バスメーはマレーシアに移り、首相府に雇用されて宗教書の翻訳などを行った。1996年7月14日、バスメーは84歳で心臓の病気のために亡くなった²⁶⁾。

バスメーは体系的に宗教教育を受ける機会がなかったが、読書と翻訳を通じてイスラム教とムスリム社会についての理解を深め、マレー・イスラム世界における主要な知識人となった。このような経歴を辿った人物が社会において重要な役割を担うことができたという意味で、『カラム』が刊行されていた1950年代から60年代にかけての時期は、カラム(筆)すなわち知識と言論が力を持つ「カラムの時代」であった。

参考文献

- 國谷徹 2010 「連載記事「クルアーンの秘密」に見るイスラム近代主義：予備的考察」坪井祐司・山本博之(編著)『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター、pp.18-25。
- 國谷徹 2011 「連載記事「クルアーンの秘密」に見るイスラム近代主義——予備的考察(2)」坪井祐司・山本博之(編著)『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター、pp.9-16。
- 山本博之 2003 「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科)、第7号、pp.59-73。
- 山本博之 2006 『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。
- Wan Ramizah Hasan. 2000. *Sumbangan Sheikh Abdullah Basmeih dalam Bidang Tafsir: Kajian Khusus Terhadap Kitab Tafsir Pimpinan al-Rahman*. Disertasi. Universiti Malaya.

24) 以下はシンガポールのマレー語日刊紙『Berita Harian』(1966.11.9、1967.3.17、3.18)に掲載された記事をもとにしている。

25) 15分間の出演料は15ドルだった。1965年8月に担当者が交代になると、バスメーは取材に答えて、自分はリー・クアンユー首相を批判したために政府から避けられたのだらうと語った[Berita Harian 1965.8.7]。

26) ハワ・ブテは1987年7月19日に亡くなった。その数か月後、バスメーは連邦直轄区イスラム宗教局(JAWI)に勤めるハジャ・ラフマ(Hajah Rahmah binti Abu Talib)と知り合い、1988年2月8日に結婚した。